カンボジアに魅せられて

桐田奈々

私がP.C.C.に入ったのは2回生になってからでした。その時はまだ「絵本プロジェクト」という名前で、メンバーも今の半分くらいだったのを覚えています。私が入ったすぐ後に新入生も入り、先輩方が作ってくださった絵本を6月祭で売ったり、自分たちで安く増刷できる方法を生み出したり、この1年でP.C.C.はすごく成長しました。

去年を入れると、2回目となったスタディーツアーでしたが、去年の参加メンバーの少なさが原因で、情報が上手く行き渡らず、行く前はスケジュールを決めるだけで精一杯で、現地に行ってから、いろんな問題が発生しました。

一つだけ言うと、クメール語訳がほとんど間違っていたこと。これは私たちと同じような活動をしている団体に頼んだのですが、森本さんのところで子どもたちに渡そうとしたときに見つかりました。森本さんのご好意で、オフィスの方やお絵かき隊のみんなが手伝ってくれて、何とかシェムリアップの最終日に、シェムリアップで渡す分は用意でき、プノンペンからも、クメール語の貼り付け作業に追われましたが、予定していた分は渡すことができました。

この経験から学んだことは、余裕を持ってやらなければいけないこと。クメール語訳をお願いしたのもぎりぎりだったし、クメール語訳を頼んだ団体だけではなく、自分たちにも責任はあります。自分たちですると言っても、出版作業と変わらないのですから、もっと慎重に扱うべきだったと思います。

まだまだこの経験から学んだことはたくさんありますが、どうしても伝えたいことは、現地の人に直接手渡すことの大切さです。日本にいて送ることは簡単です。と言っても送ることを否定したいのではなく、自分たちが持って行くことによってできる現地の人との触れ合いは何よりも大切なものだと思います。プノンペンで見た子どもたちの笑顔は本当に輝いていて、頑張って良かった、と思いました。

カンボジアに行くまでは、「本当にカンボジアの子どもたちは絵本をあまり見たことがないのか？」、「どんな絵本が必要とされているのか？」など、頭の中は疑問だらけでした。しかし、この旅を通して、実際に感じることができたと思います。

まず、カンボジアの子どもたちは絵本をあまり見たことがないこと。絵本に限らず、カンボジアの現状には驚かされることがたくさんありました。大学に行く人が少ない、先生の給料がとても低い、学校の数が足りない、先生の数も足りない、国際会議のために貧しい人たちを追いやる政府、図鑑も見たことがない子どもたち。プノンペンで見た物乞いの子たちを私は忘れることができません。

スラムや孤児院の子どもたちはそれぞれここに来る経緯を持っています。しかし、彼らと遊んでいると、こっちが元気になってしまいます。教育は目に見えないもの、でもこの子たちの笑顔のためならもっと頑張れる、そう思いました。

絵本だけに焦点をしぼっても、私たちができることはまだまだたくさんあります。またあの子たちに会いたい、もっとたくさんの人を笑顔にしたい、素直にそう思った旅でした。
オークンチュランナッ！（本当にありがとう！）